

市仏連会報

発行所
 横浜市中区大平町96
 光明山西有寺内
 横浜市仏教連合会
 電話(045)661-0166

第五十号記念誌

会長挨拶

横浜市仏教連合会
 会長 齋藤隆法



三寒四温などと春の季節をいいますが、桜の頃を迎えたと思つたらほんとうにあつと言つ間に「三日見ぬ間の桜かな」でした。そして新緑の季節を迎えます。皆様にはお元気に過ごさうと拝

察し大慶に存じます。平素は何かと本会のためにご高配をいただき厚くお礼を申し上げます。各区仏教会におかれましては、それぞれの地域の活動によって一般の皆様、仏教の教えの一部にでもと、そのアピールに努力されておられることに心から敬意を表しております。私も花まつりなどの行事などに

招かれておりますが、その熱心なる活動状況を拝見して、心打たれるものがあります。お釈迦様が生まれて今年には二五六六年の年だといふ一説に伺います。仏紀などと申します。市仏連の中に釈尊奉讃会があります。地味ではありますが、皆熱心に活躍されています。誠に有難いことです。一人でも多く、この会に参加して釈尊のご遺徳をしのんでいただきたいと存じます。

仏様の慈悲の心にすぎり、その尊さ、ありがたさ、美しさを日常生活の中に生かしたいと思ひます。毎年のことに、その年の平和を願う事は常ですが、最近、北海道の有珠山が噴火しました。避難されておる皆様は大変な苦痛であろうと思ひます。これ以上の大きな被害にならぬよう祈念し、皆様の苦痛が一日も早く救われる事を願うものです。

市仏連では釈尊奉讃会と協働で六月五日に春の仏跡参拝を実施いたします。すでにお手元へご案内が届いておりますが、内

容的に身しい日帰りバス旅行です。のでおさそい合わせの上へご参加下さい。

なお、本誌市仏連会報も第五十号を数えることとなりました。歴代の会長、諸役の方々、とりわけ横山敏明師、玄野孝善師をはじめ会報編集に携わつてこられた方々のご苦勞に感謝申し上げます。現在のスタッフも、より良い誌面作

りにと励んでいただいております。どうか皆様方のお力添えをお願い申し上げます。

これからは新緑の季節から梅雨の季節、そして、やがては暑い夏の季節へと移行して行きます。御身体に気をつけられてお元気で過ごさして下さい。皆様のご健勝と、寺門の興隆、ご繁栄をご祈念申し上げます。

おかし、多くの資源を消費しているかを考える時、私達は今、何をし、何を子孫に伝えていくかを真摯に考えなければならぬし、自らの生活習慣を改め、自らの身体にも、そして他の人達にも迷惑を及ぼさない生き方を求めていかねばならないのだと思ひます。ここで今さらの様に、お釈迦様のおさとしが思いおこされます。あるがままの自然、移ろい変わりゆく自然、

会報五十号に寄せて

市仏連顧問 横山敏明

しては、本年に特別な意義を認めるといふ姿でなく、行く年、来る年、その一年を、また来る日、その一日を如何に生きぬくかとの考えて過ごしたかと思ひます。かつての消費礼賛、大量消費がやつと見直され、生産物そのものも地球に還元出来る材質という考えが徐やかにあるが定着しつつあります。それとてまだ最初の一年を踏み出したに過ぎません。どれだけ多くの他の生物の領域を

春夏秋冬、迷いなく回り来る姿、その中で自らも時を過し、老いてゆく、これが真実であり、仏の教えそのものだということを、おぼることなく、おそれることなくこの時、この一日を人のため、世のために精一杯に生きていかねばならないと思つて生きています。みなさま方のより確かな明日とご健康をお祈りしつつ拙文をつらねさせていただきました。市仏連の益々の発展と会員みなさまのご隆祥を念じております。

第二十五回釈尊涅槃会開催

於 正福院 保土ヶ谷・旭区仏教会

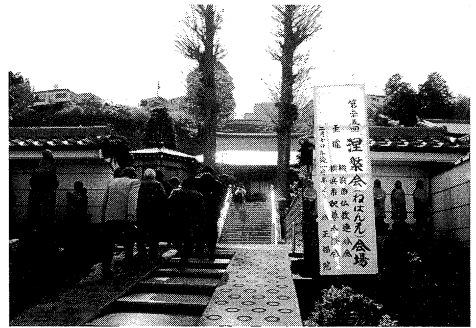
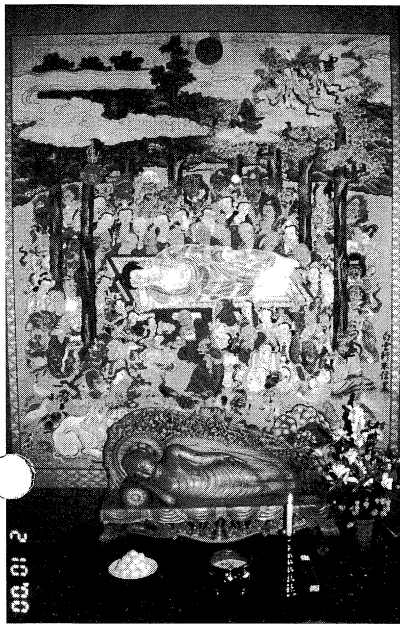
市仏連、市釈尊奉讃会主催の涅槃会が平成十二年二月十日(木)に催された。担当は保土ヶ谷・旭区仏教会で、会場は保土ヶ谷仏向町三三九の曹洞宗の仏向山正福院(山本尚亨住職)である。このお寺は相鉄線和田町駅下車徒歩五分くらいに在る。電車からも良くみえる新築の庫裡が、丘上に住宅をのせた崖の中腹に墓地を背にして建てられ、山門前の両側に公孫樹が屹立して、明るい寺観である。

当日は晴天で暖かく、午後一時受付の頃から寺院関係者や檀信徒が続々と集まって来られた。本堂内は七間四面余の広さがあるが、三百名余りの参拝者で入りきれない人出で熱気充滿し、冬日を忘れさせて貰った。

本尊の右の床の間に正福院様所蔵の大幅の涅槃図がかけられ、ゆ

つたりとしたお釈迦様のお顔や寝姿に参詣者が一様に安らぎを覚えた。この図は享保年間に白雲軒末信が画いたと伝わる。その図の下前に木彫の涅槃像が安置されていた。

午後一時半に法要開始。式衆は曹洞宗第一教区青年同志会の十一名と回向・維那役の随流院西村悦次師が勤められた。導師・市仏連会長齋藤隆法師、脇導師区仏会長三仏寺吉川瑞浩師、会処山主正福院山本尚亨師等が入堂された。市仏連専務理事の林田眞成師の司会進行のもと、市仏連副会長玄野孝善師の開式のことばで厳修。着座三礼、酒水、三帰依文唱和、導師敬白文独唱。代表二名による指名焼香、全員で観音経、舍利礼文、普廻向を誦誦。三百名余りの僧俗



つばいに広がり感動した。

二時十分頃より、齋藤市仏連会長、釈尊奉讃会の鈴木敬一郎会長(代)、横山敏明県仏副会長、保土ヶ谷・旭区仏会長吉川瑞浩師、正福院の山本尚亨住職等が各々ご挨拶をされた。

二時半過ぎから、講師の杉原顕道師(島根県加茂町の曹洞宗、大嶽山光明寺住職)の歯切れの良い熱弁を拝聴した。二度泣いた男、更にその後の物語」と題して約五十分近く、自分の体験、交友録からの如是我聞(によげがもん)の話材豊かに、仏教信者でない、周辺の若者や企業の人々に、外堀を埋め、心を耕す福田(ふくでん)づくりのため、心のかたりべを自負されて説法されるだけの力量のある、ありがたい話が終わると万雷の拍手が起こった。

川上敬吾市仏連副会長の閉会の辞があり、供物(まんじゅう、火消しの団扇、体裁よく簡便な次第

冊子)など、保土ヶ谷・旭区仏の心のもった品々と滋味あふれる法話を土産に散会した。

正福院の庫裡書院で五十名近くの僧侶が顔を揃えて、反省会をした。一時間近く過ごして、反省会となった。涅槃会の意義を充分に知らしめることができたのも、区仏寺院、正福院様寺族、市仏連、釈尊奉讃会のひとかたならぬ熱意と協力の賜物で、誌上を借りて、ありがとうございましたと感謝、御礼を申し上げます。

講演内容

『二度泣いた男、更にその後の物語』

杉原顕道師

「始まりは皆同じ、雨の一雫。問題はその終り方なのです。一滴は百滴、百滴は千滴となる。川、いつの日にか海に注ぐもの。そういう川だけが川ではない。アフリカのグアヴァンゴ河。とうとうと流れる急流大河だ。だが、大砂漠の砂に吸い込まれ消滅してしまう、海を見ずして。そんな不幸な川だつてあるのだ。生徒諸君、間違つてもグアヴァンゴ河だけにはなるなよ。」

冒頭の詩は、若き中学教師が、「お前こんな大きな夢を持っていないじゃないか、間違つてもしり切れとんぼの人生だけは送るなよ」と、エールを送っている詩です。

実は私は一番大切なものを失つてから(このこと)気がついた。高校三年の時に両親の反対を押し

切つて在家から禅宗のお寺に弟子入りしました。駒沢大学を卒業し島根県の私立高校の教員になりましたが、私の師匠の奥様が癌にかかり、やむなく二年十ヶ月でやめることになりました。特定の学校の教壇(一番大切なもの)は失つてしまつたけれど、今でも私は教師でいたいのです。ありがたいことに皆様、私を「野にある教師」と言つてくださる。感激の至りです。

車のラジオから流れてきた詩を聴いて、私は思わず大粒の涙が出てきました。

「神様が、たつた一度だけこの腕を動かしてくだすつたら、母の肩をたたかせて貰おう。風になびくペンペン草のように。本当にそんな日が来るような気がする。」

群馬県で中学の教師をしていた星野富弘さんは、放課後、先生が手本を見せるといつて空中回転をやろうとしてスッテンコロリンと首の骨を折つてしまい、二度と教壇に立てなくなりました。ラジオの詩はこの人の作つた詩です。

人間の本当の豊かさの中には、他者の為、弱者の為に泣ける喜び、泣ける豊かさ、やさしさ、それが本当の強さだと私は思っています。

もう一度泣いた。それは京都の国際会議場で講演をする時に引用しようとして読んだ教育哲学者の森信三氏の本からです。森先生の教えは、人の痛みや下積みな生活を知っていないと本当のパーフェクトな人間とは言えないということです。この森先生の信頼する杉

田まさおみという眼科医の先生が詠んだ百編の詩を読んで、私は先が見えなくなる程、涙が出た。「私はこの父の靴のひもを結ばなかったことを恥じる。私はこの父の爪の垢を煎じて飲まなかったことを悔いる」

私の父は一介の農夫であったが、八十八才で亡くなる前にこんな句を残していました。

「多事多難、人生航路もつつがなく、老いて黄泉路(よみじ)をたどるうれしさ」

また、亡くなる直前には「夏空に雲と消えゆく我が身かな」という句も残しています。

元文化庁長官で作家の三浦朱門先生が、私の寺に泊まれた時に聞いた話ですが、先生のお父さんは九十二才で亡くられたそうですが、直前に詠まれた句は「かまきりが枝に枯れ居て切らずおる」だったそうです。又、お母さんの辞世の句は「トン、マミ、マリさんありがとう」だそうで、お父さんの格調高い句に比べるとガクッとしますが、いかにもほのぼのとした人間三浦朱門一家のあたたかさを感じます。マリはお姉さん、

マミは恐らく、さんの菅根綾子さんで、トンとは、トンマでマヌケな朱門さんの家族間での呼び名だそうです。

また、平山郁夫画伯も私の寺に泊まれた、文化勲章の受賞作品「古代出雲幻想」をここで描かれました。私の解釈した「愛語」(『修証義』第四章の「詩」に対して、奥様から「グー」と言って賞讃の言葉を送っていただきました。

「言葉は、時に刃よりも鋭く、人の心を傷つけることがある。しかも、何気ないこの言葉は、二度同じ過ちを犯しかねない。だからこそ、人は互いに、やさしく温かい愛語を心がけなければならぬ。人はまた、この言葉によって、絶望の淵から生きる力を、よみがえらせることも実に多いのだから。」

時局対策委員会報告

檀徒向葬儀リーフレット作成へ

委員長 佐藤 功 岳

今期、本委員会は、横浜市仏教連合会名にて檀徒向けリーフレットの作成と葬祭業者との協議テーブルの設置を計画いたしました。前号の本誌にて、平成十二年二月を協議テーブルの設置予定と報告いたしました。

原稿寄稿後の委員会にて検討の結果、リーフレットを各寺院に配布し、その後にテーブルを設置した方がよいのではないかと結論に至りました。

各聖には、事業変更のご報告が

さらに私のオリジナル語録の「つに飢(き)、寒(かん)、乏(ぼろ)」がある。梅は寒苦の候を経て、清香を発する。人間は成長過程に適度な飢えや寒さ、乏しさをいかに折り込むかが大切。人の悲しみに泣けるということは、他者の痛みを知っているんです。教理教典とは縁のない私ですが、宗教は大切だと考えております。世界には優秀な仲間がいっぱいいます。私は私の持ち分を発揮したいと思えます。誰かに何かに支えられ、生かされて生きているこの生命だから私は誰かの風となろう。明日は誰かが私のための風となろう。ありがとうございました。

(編集子抜粋要約)

前後いたしましたこと誌面をお借りしてお詫び申し上げます。さて、今日は家庭で臨終を迎えることが稀となり、大多数の方が病院で臨終を迎えます。

このため、菩提寺への連絡もすべしということが無くなり、経(枕経)の依頼に至っては皆無に等しくなりました。

また、夜半での場合には檀方の菩提寺への遠慮と、業者のアドバイス不足により、全てが決定され、時によっては、親族、知人への連



大変有意義なご助言でありましたので、連合会にお譲りの上、受け入れたく考えております。

参加ご希望の方は、是非一報いただきました。存じます。また、過日、ご連絡をいただいた件が、私共の危惧している事例ですのでご紹介いたします。

ある檀家で、霊園に墓地のある方から葬儀の連絡がありました。日程が合わぬため、日時の変更を申し入れたとの由。

しかし、設営する葬儀社が、その檀方にアドバイスをして、無理ならば、葬儀社契約の僧侶で行うこともあると言われたそうです。

このことは、業者が寺檀関係にクサビを打ち込む行為として不愉快に存じますし、種々の理由を考慮しても、とても認められることではないと存じます。

こうしたことが広まると、宗教のコンビニ化を助長し、つらく、面倒なことや、修行がどんどん避けられることにもつながっていくことではないでしょうか。

今回は業者の名前は伏せますが、かつてその業者は自社のリーフレットにお布施、戒名料まで掲載しておりました。

こうした事例がありましたら今後も是非委員会までお寄せ下さい。

涅槃会担当区予定

- 第26回 平成13年 瀬谷区
- 第27回 平成14年 泉区
- 第28回 平成15年 栄区

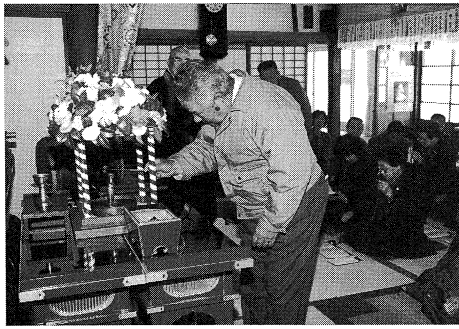
話材紹介

三仏忌のうちの成道会(は)県仏で、涅槃会は市仏連、花祭り(は)区仏でという以前よりの申し合わせで仏教会行事が行われている。今号の話材紹介は、花祭りにまつわることを雑学的に調べ、併せて市内の花祭り事情について紹介したい。

一、名の由来

「花まつり」、お釈迦様の誕生日の四月八日に花御堂を任つらえて、誕生仏をたらいの中に祀つて甘茶を赤ちゃん姿の仏像の頭から灌ぎ(そそ)ぎ、お生まれを祝福する行事である。仏生会(ぶつしょうえ)、灌仏会(かんぶつえ)、降誕会(こうたんえ)、童華会(りゅうげえ)、といろいろに呼称されるが、明治時代以後は、真宗大谷派蓮窓寺安藤嶺丸師の命名した「花祭り」が一般的に普及している。

偉人に伝説はつきものである。



お釈迦様も例なく、生誕にまつわることも、我々凡人とは違つた兆しや奇端として、信仰上の伝説が数多く後世に残されている。

母マヤー夫人は、白像が胎内に入る夢を見て赤ちゃんを身籠つたことを知る。マヤー夫人は産み月の近い頃に、出産のため隣国のコリーヤに里帰りの旅の途中、ルンビニーの花の公園で休憩された。そこに美しく咲いている無憂樹(アショール)の花の一枝を手折らんとした時に、夫人の右脇下から男児が生まれた。そこへ二頭の龍が現われて、水とお湯(甘露水)をかけて赤ちゃんに産湯をつかわせ、体を洗つたという。自然も祝福して、地には蓮の花などが一面に咲

花まつり雑考

き、帝釈天も喜び、花や香水が天から舞い、降り注いだそうだ。お釈迦様は花の絨毯にふわりと降り立つ(降誕)や、すぐ七歩あるき、右手を上げて天を、左手を垂らし地を指して、大きな張りのある声で「天上天下唯我独尊」(てんじょうてんげゆいがどくそん)と唱えられたと伝わる。七歩の意味としては次のように解釈されている。

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の迷いの心象風景の六道輪廻の世界から一歩抜け出して、悟りの世界、真実の人格者たる道に入り、仏道を歩こうとされる心と姿を強調している説話である。また、インドの数学で七は多数・完全を表すため、東西四方は七歩あるい

た「周行七歩」の伝説をもとに、花祭りの名称、行事が生まれたともいえる。

二、生誕年について

誕生の年は諸説がある。伝統的には西暦紀元前六二四年説と、前五六五年説に分かれていたが、近代の研究の成果として、

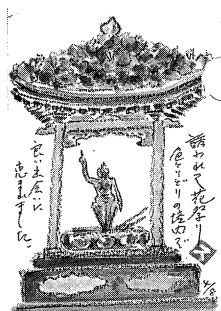
- ① 紀元前五六六年説 高橋順次郎
- ② " 五六〇年説 水野弘元
- ③ " 四六六年説 宇井伯寿
- ④ " 四六三年説 中村 元

の諸説が文献等を根拠に論じられている。確定することは困難であるが、①④が有力であるため、これらの説によれば、今年(2000年)は仏誕二千五百六十六年乃至二千四百六十三年となる。

三、花祭りの歴史

仏生会(は)インド・中国でも古くから行われ、日本では推古天皇の時代(六〇六年)に寺毎に祝育することとなり、平安時代の承和七年(八四〇年)四月八日に宮中清凉殿で灌仏を修し、年中行事となった。鎌倉時代に東大寺、薬師寺、東寺で恒例となつていた記録がある。中世では五色の香水を混ぜていたが、江戸時代になつてから甘茶を用いるようになる。

現在では陽暦の四月八日に、全国の多くの寺で花祭りが行われるが、花の遅い東北・北陸地区などでは五月八日に営む所も多い。南アジアの仏教国では、ウエーサカ祭として五月の満月の日に、降誕



会、成道会、涅槃会の三仏忌を同時に行う。日本ではその昔、「ちはやふる卯月八日は吉日よ、神さげ虫をせいはいぞする」という歌をお寺で書いて貰い、台所などに貼っておく習慣もあった。悪い虫を避けると言われたらしい。

四、誕生仏について

釈尊が生まれたときのお姿を表した仏像、つまり誕生仏にはおよそ二種類がある。

- ① 東大寺型：ふつくらとして子供っぽい姿のもの。
- ② 大報恩寺型：童顔の中に使命感を湛えた姿で、両手が少し細めになっている。

また、普通は右手を上げているが、稀に左手を上げていた姿のものもある。中国や朝鮮半島の誕生仏はほとんどが左手を上げていたという。右手を上げるという意味は、「尊い一人としての誕生を祝い、拝みなさい」という意の姿だそうだから厳しい。しかし、この時の一人には、それぞれの万人の尊厳をも含んだものと言える。一方、左手を上げている方は、「何も生まれても良い、衆生を救うために生まれて来たのだから、仏の誕生を信じてくれれば良い、いつも見守っているよ」という心を表している姿なのだそうである。

五、誕生偈の意味

生誕の時に発したという「天上天下唯我独尊(私は世界のうちで最勝のものである)」という意のことばは、通俗に「世の中で自分だけが偉い」、「我こそは天下国を下を統治する指導者である」との独りよがり、うぬぼれの意に解釈されやすい。私達僧侶は、常に正しい見解を持つべきであらう。いくつかの解釈例を紹介する。

▼現代の仏教家は、この詩句は人間の尊厳をいい表したものだとする。(『仏教語大辞典』中村元著)

▼全宇宙のいのちと恵みを一身に受けて、一人の人間として生まれてきた素晴らしき、尊さを叫ばれた。これは何もお釈迦様に限ったことではなく、私達は皆、人間として唯一無二の心と体を持って生まれてくることの喜びがあり、生まれながらにして私達は一人ひとり尊い身体、言葉、心を持っている。生まれながらにして一人の仏として生まれてきているとの自覚を持つことば。(『真宗宗豊山派宗報第608号』吉田敬岳)

▼唯我とはオンリーワン、絶対の一人です。絶対の一人とは、一人ひとりの心の中に根源的なところのいのち(仏心)が宿っているとこのことばです。だから人間は尊い。仏心は智慧と慈悲の心です。この仏心をはたらかせて人々に尽くしていく誓いが誕生偈の意味です。

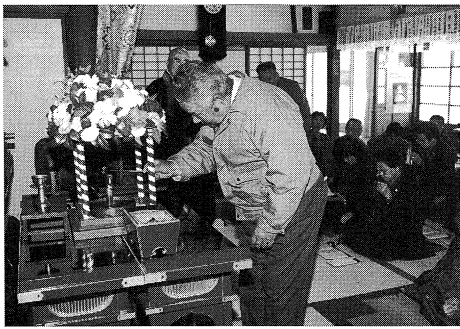
▼この大宇宙の中で「あなた」という個性、人間はたった一人しか

話 材 紹 介

三仏忌のうちの成道会は県仏で、涅槃会は市仏連、花祭りは区仏でという以前よりの申し合わせで仏教会行事が行われている。今号の話材紹介は、花祭りにまつわることを雑学的に調べ、併せて市内の花祭り事情について紹介したい。

一、名の由来

「花まつり」、お釈迦様の誕生日の四月八日に花御堂を任つらえて、誕生仏をたらいの中に祀って甘茶を赤ちゃん姿の仏像の頭から灌ぎ(そそ)ぎ、お生まれを祝福する行事である。仏生会(ぶつしょうえ)、准仏会(かんぶつえ)、降誕会(こうたんえ)、童華会(りゅうげえ)、といろいろに呼称されるが、明治時代以後は、真宗大谷派蓮窓寺安藤嶺丸師の命名した「花祭り」が一般的に普及している。偉人に伝説はつきものである。



お釈迦様も例なく、生誕にまつわることも、我々凡人とは違つ兆しや奇端として、信仰上の伝説が数多く後世に残されている。

母マヤー夫人は、白像が胎内に入る夢を見て赤ちゃんを身籠つたことを知る。マヤー夫人は産み月の近い頃に、出産のため隣国のコリーヤに里帰りの旅の途中、ルンビニーの花の公園で休憩された。そこに美しく咲いている無憂樹(アショカ)の花の一枝を手折らんとした時に、夫人の右脇下から男児が生まれた。そこへ二頭の龍が現われて、水とお湯(甘露水)をかけて赤ちゃんに産湯をつかわせ、体を洗つたという。自然も祝福して、地には蓮の花などが一面に咲

花まつり雑考

き、帝釈天も喜び、花や香水が天から舞い、降り注いだそうだ。お釈迦様は花の絨毯にふわりと降り立つ(降誕)や、すぐ七歩あるき、右手を上げて天を、左手を垂らし地を指して、大きな張りのある声で「天上天下唯我独尊」(てんじよみてんげゆいがどくそん)と唱えられたと伝わる。七歩の意味としては次のように解釈されている。

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の迷いの心象風景の六道輪廻の世界から一歩抜け出る道に入り、世界、真実の人格者たる道に入り、仏道を歩こうとされる心と姿を強調している説話である。また、インドの数学で七は多数・完全を表すため、東西四方に七歩あるい

た「周行七歩」の伝説をもとに、花祭りの名称、行事が生まれたともいえる。

二、生誕年について

誕生の年は諸説がある。伝統的には西暦紀元前六二四年説と、前五六五年説に分かれていたが、近代の研究の成果として、

①紀元前五六六年説 高橋順次郎
② 五六〇年説 水野弘元
③ 四六六年説 宇井伯寿
④ 四六三年説 中村 元

の諸説が文献等を根拠に論じられている。確定することは困難であるが、①④が有力であるため、これらの説によれば、今年(西暦)は仏誕二千五百六十六年乃至二千四百六十三年となる。

三、花祭りの歴史

仏生会はインド・中国でも古くから行われ、日本では推古天皇の時代(六〇六年)に寺毎に祝育することとなり、平安時代の承和七年(八四〇年)四月八日に宮中清凉殿で准仏を修し、年中行事となった。鎌倉時代に東大寺、薬師寺、東寺で恒例となっていた記録があったが、中世では五色の香水を混ぜていたが、江戸時代になってから甘茶を用いるようになる。

現在では陽暦の四月八日に、全国多くの寺で花祭りが行われるが、花の遅い東北・北陸地区などでは五月八日に営む所も多い。南アジアの仏教国では、ウエーサカ祭として五月の満月の日に、降誕



会、成道会、涅槃会の三仏忌を同時に行う。日本ではその昔、「ちはやふる卯月八日は吉日よ、神さけ虫をせいばいぞする」という歌をお寺で書いて貰い、台所などに貼っておく習慣もあった。悪い虫を避けると言われたらしい。

四、誕生仏について

釈尊が生まれたときのお姿を表した仏像、つまり誕生仏にはおよそ二種類がある。

①東大寺型：ふっくらとして子供っぽい姿のもの。

②大報恩寺型：童顔の中に使命感を湛えた姿で、両手が少し細めになっている。

また、普通は右手を上げているが、稀に左手を上げていた姿のものもある。中国や朝鮮半島の誕生仏はほとんどが左手を上げていたという。右手を上げるとい意味は、「尊い一人としての誕生を祝い、拝みなさい」という意の姿だそうだかららしい。しかし、この時の一人には、それぞれの万人の尊厳をも含んだものと言える。一方、左手を上げている方は、「何もしなくても良い、衆生を救うために生まれて来たのだから、仏の誕生を信じてくれれば良い、いつも見守っているよ」という心を表している姿なのだそうである。

五、誕生偈の意味

生誕の時に発したという「天上天下唯我独尊(私は世界のうちで最勝のものである)」という意のことばは、通俗に「世の中で自分だけが偉い」、「我こそは天下国を下を統治する指導者である」との独りよがり、うぬぼれの意に解釈されやすい。私達僧侶は、常に正しい見解を持つべきであろう。いくつかの解釈例を紹介する。

▼現代の仏教家は、この詩句は人間の尊厳をい表したものだとする。(『仏教語大辞典』中村元著)

▼全宇宙のいのちと恵みを一身に受けて、一人の人間として生まれてきた素晴らしさ、尊さを叫ばれた。これは何もお釈迦様に限ったことではなく、私達は皆、人間として唯一無二の心と体を持って生まれてくることの喜びがあり、生まれながらにして私達は一人ひとり尊い身体、言葉、心を持っている。生まれながらにして一人の仏として生まれてきているとの自覚を持つことば。(『真言宗豊山派宗報第608号』吉田敬岳)

▼唯我とはオンリーワン、絶対の一人です。絶対の一人とは、一人ひとりの心の中に根源的なところのいのち(仏心)が宿っているということ。だから人間は尊い。仏心は智慧と慈悲の心です。この仏心をはたらかせて人々に尽くしていく誓いが誕生偈の意味です。

▼「大心国師語録」松原素道著

▼この大宇宙の中で「あなた」という個性、人間はたった一人しか

いない。だからとつても尊いのだ。自分自身に自信を持ってないでいるあなた…。あなたという人は貴方しかないのだから胸をはって生きたまえと、お釈迦様はお示し下さったのだ。(真言宗『光明』)

▼あめがうえ、あめがした、われにまさる聖者なし。それはシッダールタ太子の初声であった。(『仏教とつておきの話』ひろさちや著)

▼世界の人口が五十億人なら、五十億の「我」がある。誰もが尊いものを持っている。このいのちが誰とも取り替えることのできない尊いものである。だからそれを十全に輝かせて生きよう。これが釈尊誕生にまつわる伝承の真意である。人間の尊さを前面に押し出した釈尊だからこそ生まれた伝承といえる。(『密教と暮す三六五日』寺林峻)

▼めいめいの人が自分を大切にして責任を果たすということです。(『おしやかさま』中村元・福井一道著)

なお、誕生には古くは「天上天下、唯我独尊」に続いて「三界皆苦、我当安之」の句が添えられている。「天上にあつても天下にあつても自分一人が尊いものであり、必ず人々を生老病死から救おう。これが私の最後の生まれ変わりである(この生以降は輪廻転生しない意)。(『仏教とは何か』大正大学仏教学科編)という釈尊の強い決意と自信の面でもらえる論調も多い。

六、花御堂と灌仏
釈尊の生誕地のルンビニーの花

園になぞらえて、その時季の花々で屋根が葺かれ、周囲が飾られた小さな堂を「花御堂(はなみどう)」と呼んでいる。日本で花御堂をつくって釈尊誕生仏を安置する習わしは、室町時代以後といわれる。因みに、前述のように灌仏の儀式は平安時代から、甘茶による灌仏は江戸期からである。

甘茶の木はアジサイの一種。高さ一メートル程の落葉灌木。この新芽を蒸し、乾燥させたものを煎じると甘みを生ずるところからこの名がある。誕生仏への灌沐は釈尊降誕の時、歓喜した天龍が(甘露)水を灌いだ産湯に由る。

七、区仏花祭り
本年春の区仏花祭りは次のよう



に行われた。

- ◎鶴見区：3月30日、寿徳寺、一般二百人、20ヶ寺参加、講演
- ◎金沢区：4月2日、長生寺、昭和22年から54回目、稚児行列あり
- ◎西区：4月3日、勸行寺、毎年市仏連会長の話、観音経読誦
- ◎保土旭区：4月5日、清来寺、約百名参加、灌仏(代表)

◎戸塚区：4月8日、善了寺、戸塚町仏中心、余興、子供会参加

◎港区：4月8日、東照寺、心経、法話、落語、14ヶ寺、70名

◎都筑区：区内の駅構内に花御堂を設置、甘茶配布、略黒衣で立つ

八、各寺花祭り見聞録
神奈川新聞に市内寺院二ヶ寺の花祭りが紹介されていた。

(極楽寺)
緑区西八朔町。法要の後、津軽三味線演奏会。花御堂はカーネーションをセロテープで貼つたもの。木製彫刻のコレクションの展示等。(宝積寺)磯子区上町。境内のホールで仏画像、写仏体験教室、講演会、インド音楽演奏会など。

つづいて、編集子が見聞きした市内寺院の花祭り模様を紹介する。ある地域の寺院十五ヶ寺程を四月八日に巡回した。ほとんどの寺院で花御堂を設けてあつた。本堂内に置く寺院と向拝に置く寺が半々位。屋根を生花で葺いて飾つてあつたところは少なく、仏具店で求めた銅葺き、金箔貼など立派なものが多い。そのため、多くは花瓶に花を活けて机に置いている。金だらいに満たしている甘茶を自由に柄杓で掬って灌仏し、側に湯飲み茶碗や紙コップ、ポットか薬缶等がお盆に置かれているのを飲んでゆくパターンが多い。

或る区仏の会合で花祭りが話題に上つた。(この区では以前に区仏としての花祭り開催を検討したこともあつたが、立消えになつてしまつたそうだ。)

一個々の寺と重複の回避が難しく、



解決できなかったね。」

「スーパーカーコンビニストアの一角に花御堂を安置させて貰い世間にもアピールしたかった。」

「会員の多い区仏では出来るが少数寺院の区仏では無理だよ。」

つづいて話題は各寺の花祭りに。A寺「当日は朝から大忙しだよ。勤行時に回向文を称え、降誕灌仏会を併せ行い慶祝とし、その後、向拝階段に小御堂を移設し、傍らに甘茶をポットに入れ、茶碗を用意してご自由にお詣りをして飲んで貰う。鈴や菓子も用意するよ。」

B寺の和尚言く「数年前に八福神巡りの方々が各寺の甘茶をほしご飲みしてきて、ここは丁度よい甘さだがあそこは少し甘すぎたなどと評された。気にするつもりはないが今年はどうかとつい何度も試飲してしまふ。(笑)

「うちは甘茶のみを使い、百ccにつき二g程が渋味が出ない。」

「経験では二番出しが旨い。」

「私の知り合いの住職は元旦に年賀状を出さない。四月八日の花祭りを寺の新年として出している。」

などと話題にこと欠かない。

編集子に集つた様々な苦勞話をジャンル別に拾い出してみよう。

(甘茶)

飲みだけに、管理には気を使

うことも多いようだ。朝九時から日没までと決めている寺院もある。

「最近はお茶番をしていないと何を混入されるか不安になる物騒な世の中だ」と注意する和尚さんもいられる。障子や引戸を細めに開けておく。ほこり風の多い日には特に気を使うとか。

甘茶は、薬局にて調達できるが、最近では入手も仲々困難になり、木を境内に植えた住職もいられる。紙パックの甘茶は味がよくないといつて、漢方薬の通信販売を取り寄せている寺院もある。甘茶の代わりに紅茶を使っている寺もあるようだ。ある寺では、大釜に一番茶を煎じ、その中に二番茶を混ぜて量を増やす工夫をしているという。薄い濃い味の味の差は仕方のないことである。近所の寝たきりのおばあさんに分けている例もあるとか。

昔は竹筒に入れたというのが、今はジュースの瓶やペットボトルを持つてくる。最近多く出回っている小型のペットボトルが手ごろで便利である。

(花御堂)

花御堂を生花で飾るときに多い花は椿である。昔は白木の屋根に、四面を布糊で花や花びらを貼つた。前日作つて、霧吹をかけて長持ちさせたり、四面は大変なので正面のみ飾っている寺もあったとか。花びらは大変なので屋根に金網をかけて、花の茎ごと差し込んで寺院もある。また、両面テープでくっつけていると云う所もある。菜の花や紫大根の花、雪柳や黄水仙、



れんぎょうなど境内の時季の花を総動員して飾り、時には法事の供花を利用することもあるという。大きな花瓶に桜の花を枝ごと活けて供花とする寺院もあるようである。四月には花が少ないので、五月八日につづいでいっばいに飾りこむ寺院もあるという。手伝いには婦人会、子供会などに依頼し、お花紙の造花をつくる寺もあるそうである。ある寺を訪ねたら参道いっばいに万国旗が飾りつけられていて驚いたがきれいであった。

〔イベント・供物〕
花祭りは、祝賀ムードとなるため、法会と併せて檀信徒総会を開いたり、楽しい催しを企画している寺院も多い。レコード新人歌手のサイン会とか、ピアノ、三味線その他の演奏会、今年は一ハ一モ二力の演奏会を行った寺院もある。法要に讃仏偈など仏教儀式音楽をかけたりする寺。また、お茶会、句会、短歌会を催す寺もあった。港北区他では落語会であった。

甘茶の外にも、飴やお菓子を事由に持ち帰ってもらう所も多い。また、大鍋でおでんを煮炊きして接待する寺もある。草餅などを持ち寄り、花見会を兼ねる寺院もあるようである。

今年のような吹雪の中の花祭りもあれば、雪や雨が降って人出の少ない年もある。津々浦々の寺院で花祭りを営み、布施と慈悲心の実践の目にと切に祈る。

支部だより

保土ヶ谷・旭区

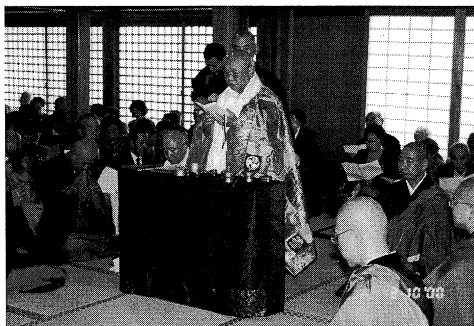
年度後半の行事は、秋の仏跡参拝から始まった。

十月二十九日、好天に恵まれ、八十三名の参加者は、分福茶釜の茂林寺、坂東靈場九番の慈光寺へと巡拝をした。恒例の行事ではあるが、そこには常に変化が見られるが、人も自然にも。その変化に出会うのも旅の楽しさであり、流す汗は健康的である。

十二月六日、「成道会」が保土ヶ谷区の曹洞宗川島山随流院を会場に開催された。旧小机領観音霊場第六番のお寺でもある。法要後の記念講演は、上原進先生(神奈川県真向法協会会長)を講師とし、講題「心身共に健康になりたい人へ」と題し、一時間半にわたる実技を交えての熱演に、二百名余りの参加者はあらためて健康であることの大切さを知らされた。終って温かいケンチン汁を頂き散会した。

十二月十七日、歳末助け合い托鉢を、JR保土ヶ谷駅前、相鉄線天王町駅前、二俣川駅前にて実施。浄財を神奈川新聞厚生文化事業団に寄託した。第十六回目の歳末托鉢である。

平成十二年二月十日、市仏連、



積尊奉讃会第二十五回涅槃会が、保土ヶ谷・旭区仏教会が担当して実施された。会場は保土ヶ谷区曹洞宗仏向山正福院。当日は快晴に恵まれ、豊かな自然につつまれた境内には、この日待っていた多くの参詣者の姿が見られた。

区として大変よろこばしく、各位に対し御礼を申し上げます。

緑・青葉区

緑・青葉区連合仏教会では、二年に一度程度の予定で一日バス参拝旅行を企画しています。区域内寺院檀信徒の方々を募り、日帰りでお参りできる首都圏の名刹、名跡をたずねて居ります。

ご参加の方には、隣近所の寺どうし、或いは宗派を超えたご縁の中に親類や知り合いを見つづける事も多く、好評を頂いている様子です。

今回は五月二十五日に、巢鴨とげぬき地藏さんをお参りした後、芸術座「渡る世間は鬼ばかり」観劇を予定しました。

多くの人々にご参加を頂き、親睦をはかりながら、楽しくお参りができます事を祈って居ります。

泉区

先年十一月六日・七日に下飯田の東泉寺様におかれましては、晋山結制の式典が挙行されました。先住の関水宗孝老師(七十七歳)は泉区仏の第二代会長を務められ、ご尽力いただきましたが、この度、ご息の俊道師に任職を譲られて東堂職となられました。俊道師は市仏連の会報担当職として日頃より活躍されています。当日は市仏連より、前会長横山敏明老師、副会長安野孝善老師を始め、区仏諸師の臨席のもと曹洞宗の儀式典札に従い厳肅に執り行われました。早朝からの稚児行列は雨が心配さ



れましたが、お祝いの打ち上げ花火の音に雲も晴れ、色とりどりの幼小児、御詠歌の方々その他多数の参列者で沿道が埋めつくされました。東泉寺様は泉区の西南端で田園地帯の広がる地区ですが、近年、近くに相鉄線の「ゆめが丘駅」と地下鉄の「下飯田駅」とが開業し、また環状四号線の工事も進み、交通の便が良くなりました。

また、新橋町観音寺様では、先住様ご遷化に伴い、梅田保彦師が就任され、岡津の西林寺様におかれましては、昨年四月より、前住職大橋俊雄上人が別格本山蓮華寺の監寺職に就任され、任職を御子息の俊史師に譲られています。地域の発展と共に若い世代の方々の大いなる活躍に期するところであります。

それから私、丸地良信は、三月三十一日付で会長職を任期全うし退任致しました。いろいろお世話に相成り、ありがとうございます。なお、平成十二年四月一日よ

り泉区仏会長に、永明寺住職の石田征史師(曹洞宗)がなされました。

瀬谷区

四月九日に定期総会が平成十三年二月の涅槃会当番の件、その他の審議で妙光寺様において持たれます。今回も引き続き瀬谷八福神をご紹介します。布袋尊の西福寺です。弁財天の宝蔵寺より厚木街道をこえて南に四百メートル、静かな路地から石畳の参道を通って広い境内に入るとよく手入れされた庭木と豊かな樹木に心が浄められます。正面の奥に大正十二年関東大震災で倒壊のために昭和五年に再建築の西向き本堂があり、本堂手前左には、南側に傾斜した名木、千年椎の大霊木が参拝者を圧倒するかのよう。枝葉を広げ空を覆っています。目通りの幹の回り約六mです。北側と樹心は枯死空洞状態です。五年前に樹医の手当で支柱を数本たて、春には新葉も出て夏にはアオバツクが巣をかけ、子育てをしセミやカブトムシなどの餌を求めて夕方から夜間飛び交っています。布袋尊堂は千年椎木の対面の南側、参道の右側にあります。西福寺は猿王山本性院西福寺と号し、真言宗豊山派。総本山は奈良県桜井市の長谷寺です。当寺の本尊は不動明王。寺伝不祥。地域の伝えでは室町時代の天文三年(一五三四)に僧、善海創建とあります。布袋尊は中国に実在した禅僧の契此(かいし)がモデルといわれ弥勒菩薩の化身として信仰を集め

ています。半裸の太鼓腹、大きな布袋、団扇がシンボル。ほてい和尚のいわれの大布袋の中には沢山の福を詰め、破顔大笑、無欲大量、執着心を捨て、こだわりのない、おおらかさで、吉凶や晴雨の予知に優れていました。人の求めに応じ、一切切袋の中から惜しげもなく福德と生活の智慧を分かち与え、福の神として崇拜されておられます。一見、行儀のよくない姿は実際に人が大安、心したときの格好だそう。布袋和尚は托鉢のとき、いつも「一鉢千家の飯」と唱えます。「一碗のご飯にも多くの努力がこもっていますから、そのお陰に答えて社会の役に立ちましょう。こう決意したことで、袋に一杯の生活必需品に恵まれ、大安心という訳です。「法悦もかく日当れる花の寺」(小林三青)の句碑が布袋堂横に建ち、「智の欲しや布袋詣りに万年青の実」(大塚操)と八福草の万年青が植えられています。「地より湧きしきながら、鎮まる仏足跡手触(たふ)るる諸人を救ひ給はな」(熊沢正一)と歌われます。



第4回ワールドミュージックコンサート
水空の響
声明・雅楽・大鼓
2000年3月18日(土)
都筑公会堂

都筑区

各宗派の交流はもちろんのこと、ひきつづき開かれた仏教会を心がけています。近況として、三月には、公会堂で声明コンサートに酒水、散華等で協力(右京スター)。花まつりには区内の駅での、寒風の中仏教会の旗をなびかせながら各宗派共通の黒依で甘茶等を配布し、子供達を含め多くの人々の笑顔を見ることが出来ました。五月には、第五回つづきの丘新能に出演等、仏教会として、日常的な活動と共にイベントにも参加しています。今後共いろいろな形で交流をつづけてゆきたいと思っています。永田英司記

栄区

昭和63年9月29日、栄区仏教会が設立されて以来4期12年間(規約は1期3年となっています)、私儀、大誓寺の塩沢栄一が会長を勤めてまいりました。

先日、区仏理事会において、「各住職方に区仏内外(市仏連、県仏などを含めてのことです)の役職を経験することも必要」というこ

とになり、平成12年4月より左記のように改選されました。

- 会長 般若院 星野英秀
副会長 長光寺 菅原紹雄
理事 定泉寺 渡辺宜昭
" " 正安寺 小林誠道
" " 長慶寺 中村良照
庶務 證菩提寺 一守隆真

拙僧、長年に亘る諸大徳の御指導、御鞭撻に深甚の感謝を申し上げ、後事を選出諸理事に託してご挨拶とさせていただきます。合掌。

金沢区

金沢区仏教会では、平成十二年に入ってから次の事業を実施した。一、一月二六日〜二七日、区釈尊奉讃会と共催で新春名利参拝旅行を行う。コースは横浜―甲府善光寺―蓼科温泉泊―諏訪大社―原田泰治美術館等の見学―横浜着。参加者八十名

二、二月十五日 涅槃会法要を金沢区釜利谷東、正法院本堂にて執行。当日は来賓として地区有志者他、釈尊奉讃会員、詠歌講中等、一、二〇名が参加。法要、法話の後各寺院の詠歌講員が交代で奉詠し、

港北区

今年度は会長の交代があった。会長は天台宗金蔵寺住職内田大寛師、副会長は曹洞宗貴雲寺渡辺道春師、事務局は東照寺におかれ、総会は三月に開かれて今年度の事業計画等がきまり、早速四月八日の花まつりが綱島の東照寺会館で例年の通り開催された。法要、法話のち今年は新進落語家の入船亭扇辰師の「お葬式」という、仏教会にピツタシの一席があつて満場を笑わせた。「なんでい、この牛乳は古いじゃねえか、工明治牛乳でして」「この菓は新しいのか、大正製菓でして。」(明治牛乳さん、大正製菓さん、ゴメンナサイ)もし、この入船亭さんにご用の方は本会会員の永昌寺さんにお電話下さい。今年例年の花火大会、灯籠流

更に懇親会もあつて終日盛会であつた。三、四月二日、区仏主催第五回花まつり大会を金沢区六浦、長生寺本堂で開催、当区の花まつりは昭和二十二年第一回大会開会以来、金沢区を四地区に分け交代で実施し、半世紀以上にわたつて、連続として続けられてきた。今大会は好天のもとたくさん稚児の参加を得てこれまた盛会であつた。今後の予定 五月二六日、仏教会、釈尊奉讃会共催名利順拝、だるま寺、水沢観音など 八月二六日、仏教文化講演会 講師にポール牧氏を予定

しが行われないので、かわりに何をやるかと今頭をかかえています。「万灯供養なんかどうだい」という声もきこえるような、きこえないような。おあとがよろしいようです。

◎お知らせ◎

◆ 釈尊奉讃会総会

期日 平成12年5月19日(金)

会場 中区西有寺

時間 午後2時より

内容 総会、物故者供養、講演

講師 ①関水宗孝師(前任職)

②堰代幸江様(店経営)

※関水師には海軍時代の悲惨な戦争体験と遺族、生存者との関わりについて、又、堰代様には、巡礼遍路の旅を通しての悲喜こももこの思い出を語っていただきます。両者の著書、『夜光虫』、『心路』も販売いたします。

◆ 市仏連第27回総会

期日 平成12年5月26日(金)

会場 中区西有寺

時間 午後1時〜理事会
午後2時〜総会
午後3時〜懇親会

◆ 第17回春の仏跡参拝旅行

期日 平成12年6月5日(月)

集合 横浜天理ビル前朝7時
行先 静岡岡臨濟寺、駿府城
費用 九千円

※臨濟宗妙心寺派臨濟寺は、書院から茶室へ渡る方丈庭園の景色がすばらしい。家康が幼年期を過ごした所でも知られる。一般公開はしていない。駿府城では葵博の開催中。

事務 日 誌

- 11.11.21 理事会案内発送
- 11.11.22 涅槃会第一回合同会議 (於正福院)
- 11.12.3 理事会・忘年会 (於華勝楼)
- 12.1.5 県慰霊堂(南港南区)
- 12.1.17 涅槃会案内発送
- 12.1.26 奉讃会日より発送
- 12.2.2 涅槃会第二回合同会議 (於正福院)
- 12.2.10 第25回涅槃会 (於正福院)
- 12.3.15 会報50号第一回編集集會 (於西福院)
- 12.3.30 祝電打電(鶴見区)
- 12.3.31 会報50号第二回編集集會 (於東泉寺)
- 12.4.3 祝電打電(保土旭区)
- 12.4.5 県慰霊堂(神奈川区)



涅槃会打ち合わせ(正福院)



白川郷明善寺庫裡にて



高山温泉にて

編集後記に代えて

今日の会報ができるまで

市仏連副会長 玄野孝善

私が横浜市仏連合会に引き込まれたのは、そもそも保土ヶ谷旭区仏教会の何か役員を授かって、受けたからには参加協力をしなければと思ひ、熱心に(自称)活躍をしている内に、市仏連の幹部で相談がまとまったらしく、保土ヶ谷の福聚寺住職森山正城師にまんだまされて、市仏連に引きずり込まれてしまったのを昨日のようにおぼえています。当時私は、小若造で、お茶くみから夜中までという全く知らない世界までご案内をいただきました。

会長に志村慎吾師、副会長に福永隆昭師、同じく横山敏明師、会計に森山正城師等お歴々の老師さまがたの中に入ってしまった、どちらを向いても四方八方壁が高く私の力では到底逃げ出す事はできま

せんでした。そして、私にはなんと事務局長に当たる専務理事とかの委嘱状が用意されていて、会長が声高々と朗読され渡されてしまいました。さて、一体何をどうすれば良いのかおろおろしていますと、横山敏明師から過去の事務日誌を渡され「こういうふうにはやればいんだ!」と言われ、その中をめぐって見ると細かい字でビッシリとそれもきちんと書いてある。私はいやいやこれを見ただけで肩がビリビリこつてくるのが分りました。いや、とんでもないことを受けてしまったなと思うと、なんだか急に血圧が高くなったと思った。それでも分からないことがあると横山師や福永師、森山師には手をとって教えていただきました。

県慰霊堂出仕番表

- 平成12年6月5日(月) 西区
- 平成12年10月5日(木) 磯子区
- 平成12年11月6日(月) 港北区
- 平成13年1月(未定) 金沢区

創刊以来の歴代会長名

- 題字 第七代会長 小次省元師
- 八代 金龍院 志村慎吾師
- 九代 観音寺 柳下隆侃師
- 十代 福聚寺 森山正城師
- 十一代 海照寺 滝川覚道師
- 十二代 西有寺 横山敏明師
- 十三代 福聚院 齋藤隆法師

正した文字が真つ黒で何が書いてあるのかわからない、また、ご丁寧に毛筆書きもあって、編集するに当たって字数を数えるのに一苦労も二苦労もした。また、すばらしい行書や草書で字の読み方がわからない。漢和辞典どころか書道辞典まで自分で買ってやっとなんぞと字を捜し出したこともある。こうして二、三年経つと「玄野君、君にまかせると家に持って帰ってやりなよ!今日はこれから懇親会に行くぞ」といわれ、せつかく持ってきた原稿もしまつて午前様までのおつきあい、次の日からはハチマキ姿で一人で三日も格闘したこともあった。

そうこうしている内に会報のお手伝いをして下さるというすばらしく、将来有望な若手のお坊さん

創刊号

就任の挨拶

会誌 志村 慎吾

発行所
横浜市中区大平町905
光明山仏教連合会
電話 045(641)3817

が見つかつた。このかたが、実はよく手助けをしてくれて、世間には「ひろう神」もあるんだな!とホット、ホットした気持ちになつた。そのかたは、瀬谷区の西福寺住職、備前恭忍師であつた。この

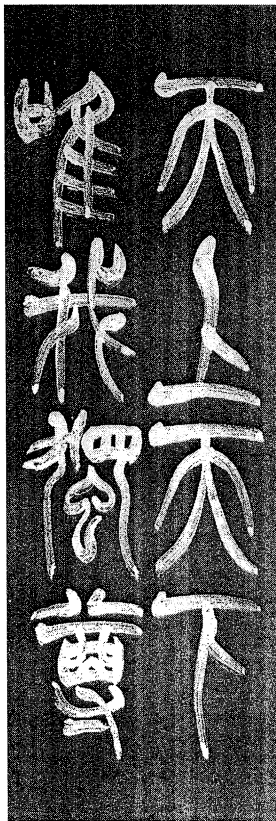
かたは、頭脳明瞭にしてかなりの書物を読んで勉強をしています。私は助かつたが安堵のため息をした。ところが、息をつく暇も無く市仏連再発足四十周年、釈尊奉讃会十周年行事が目の前にぶらさが

つた。会報も特別記念誌を発行することに決まり、私は専務理事の仕事も数多くあるので、編集委員長に南区の常清寺住職片山宣英師をお願いし三人でとりくんだ。

ところが、前例がないので手探りでやるしかない、しかし、依頼原稿がどうしても足りない。そこで、会員名簿を掲載することにした。しかし、住所の町名が変わつたり、電話番号が変わつたり、住職名が変わつたり、どこまでが会員なのか古い資料では手間取るばかり、大変に困つた。でも、すばらしいスタッフと会員諸師のお力添えを得て予想以上のものができたことは本当に良かった。今でもあのときの苦労は忘れることができない。

その後、更にうれしいことに、

もうひとかたすばらしいスタッフがはいつてくれた。そのかたは、泉区東泉寺の関水俊道師である。このかたは曹洞宗の布教師であつて、布教材料は山ほどお持ちだ。そこで、会報に布教のページをもつけ、会員諸師の布教に少しでも役立てていただこうと今、頑張っている。こうして、一つ一つを積み重ねて今日ここに創刊五十号ができたことは、ころよりうれしく思う。これも会員諸師の日頃のご協力のたまものと深く感謝申し上げます。今後も、すばらしい会報を発行して、みなさまのところへお届けしたいと思ひます。どうぞこれからもご協力のほどよろしくお願ひを申し上げ筆をおかせていただきます。



祝 創刊五十号

横浜市仏教連合会会長
高野山真言宗福聚院住職

斉 藤 隆 法

〒224 都筑区池辺町二二九六
電話 0053 九四一―八七七五

横浜市仏教連合会参与
天台真盛宗新善光寺住職

福 永 隆 昭

〒232 南区三春台一三三
電話 0002 二三一―五七五四

横浜市仏教連合会顧問
曹洞宗西有寺住職

横 山 敏 明

〒231 中区大平町九六
電話 0859 六六一―〇一六六

横浜市仏教連合会副会長
曹洞宗長昌寺住職

玄 野 孝 善

〒241-0822 旭区さちが丘五九
電話 三九一―一三七九

横浜市仏教連合会常務理事
西区仏教会長
高野山真言宗東福寺住職

増 田 大 祐

〒220-0034 西区赤門町二―一七
電話 二三一―四〇九四

横浜市仏教連合会常務理事
泉区前仏教会長
浄土宗宝心寺住職

丸 地 良 信

〒245-0016 泉区和泉町三一―九三
電話 八〇二―三一―一八

横浜市仏教連合会会計
浄土宗浄念寺住職

橋 下 賢 明

〒234-0056 港南区野庭町一―八四三
電話 八四二―七二八八

横浜市仏教連合会常務理事
港北区仏教会長
天台宗金蔵寺住職

内 田 大 寛

〒223-0062 港北区日吉本町二―四―二
電話 五六一―二〇三七

港北区仏教会副会長
曹洞宗貴雲寺住職

渡 辺 道 春

〒222-0034 港北区岸根町六一―四
電話 四九一―九三〇二

港北区仏教会会計
曹洞宗陽林寺住職

東 詰 臣

〒241-0822 港北区綱島台一―一八
電話 三九一―一三七九

横浜市釈尊奉讃会事務局長
港北区前仏教会長
曹洞宗東照寺東堂

程 木 徳 明

〒223-0053 港北区綱島西一―十三―十五
電話 五三一―一七八三

横浜市仏教連合会常務理事
金沢区仏教会長
真言宗御室派慶珊寺住職

佐 伯 隆 定

〒236-0051 金沢区富岡東四―一―八
電話 七七一―三二六四

横浜市仏教連合会監事
緑・青葉区仏教会長
曹洞宗弘聖寺住職

内 野 公 雄

〒226-0014 緑区台村町五四―九
電話 九三一―二五一二

横浜市仏教連合会常務理事
南・港南区仏教会長
曹洞宗興禪寺住職

市 川 智 彬

〒232-0007 南区清水ヶ丘二―二五
電話 七五一―〇六七二

横浜市仏教連合会常務理事
磯子区仏教会長
高野山真言宗大聖院住職

鷺 雄 興 勝

〒235-0005 磯子区東町六―二〇
電話 七五一―〇六七二

横浜市仏教連合会常務理事
神奈川区仏教会長
曹洞宗本覚寺住職

守 長 尚 文

〒221 0057 神奈川区高島台一―二
電話 三二二―〇一九一

横浜市仏教連合会顧問弁護士

遠 藤 隆 也

〒221 0022(自宅)神奈川区白幡上町一八四
〒110 0015(事務所)台東区東上野二―一八―七
電話 〇三―八三―二二八一九

横浜市仏教連合会常務理事

瀬谷区仏教会長
真宗大谷派最勝寺住職

柳 沢 柳 丸

〒246 0021 瀬谷区二ツ橋町三三七―一
電話 三六二―六〇七二

横浜市仏教連合会副会長

鶴見区仏教会長
臨濟宗建長寺派松蔭寺住職

川 上 敬 吾

〒230 0077 鶴見区東寺尾一―一八―一
電話 五七一―一七〇

横浜市仏教連合会常務理事
都筑区仏教会長
浄土宗宗忠寺住職

夏 見 邦 夫

〒224 0053 都筑区池辺町二七〇四
電話 九四一―四二七六

横浜市仏教連合会時局対策委員長
日蓮宗大圓寺寺住職

佐 藤 功 岳

〒231 0859 中区大平町九四
電話 六四一―四九三三

横浜市仏教連合会理事

鶴見区仏教会長
浄土宗宗泉寺住職

横 井 久 運

〒230 0075 鶴見区上の宮二―二四―三
電話 五八一―九三二〇

横浜市仏教連合会理事

保土ヶ谷・旭区前仏教会長
浄土宗三仏寺住職

吉 川 瑞 浩

〒241 0024 旭区本村町七六
電話 三九一―一三〇七

横浜市仏教連合会会報担当
曹洞宗東泉寺住職

関 水 俊 道

〒245 0017 泉区下飯田町七四三
電話 八〇二―八〇九七

横浜市仏教連合会専務理事

浄土宗見光寺住職

林 田 眞 成

〒240 0004 保土ヶ谷区岩間町二―一四〇
電話 三三一―〇六〇七

横浜市仏教連合会会報担当

真言宗豊山派西福寺住職

備 前 恭 忍

〒246 0037 瀬谷区橋戸三二二―二
電話 三〇一―六一三四

横浜市仏教連合会御用達

東海ビーエス観光株式会社社長

真 川 明

〒240 0022 保土ヶ谷区西久保町一―四
公園ハイツ二―一―一八
電話 三三四―三四〇〇